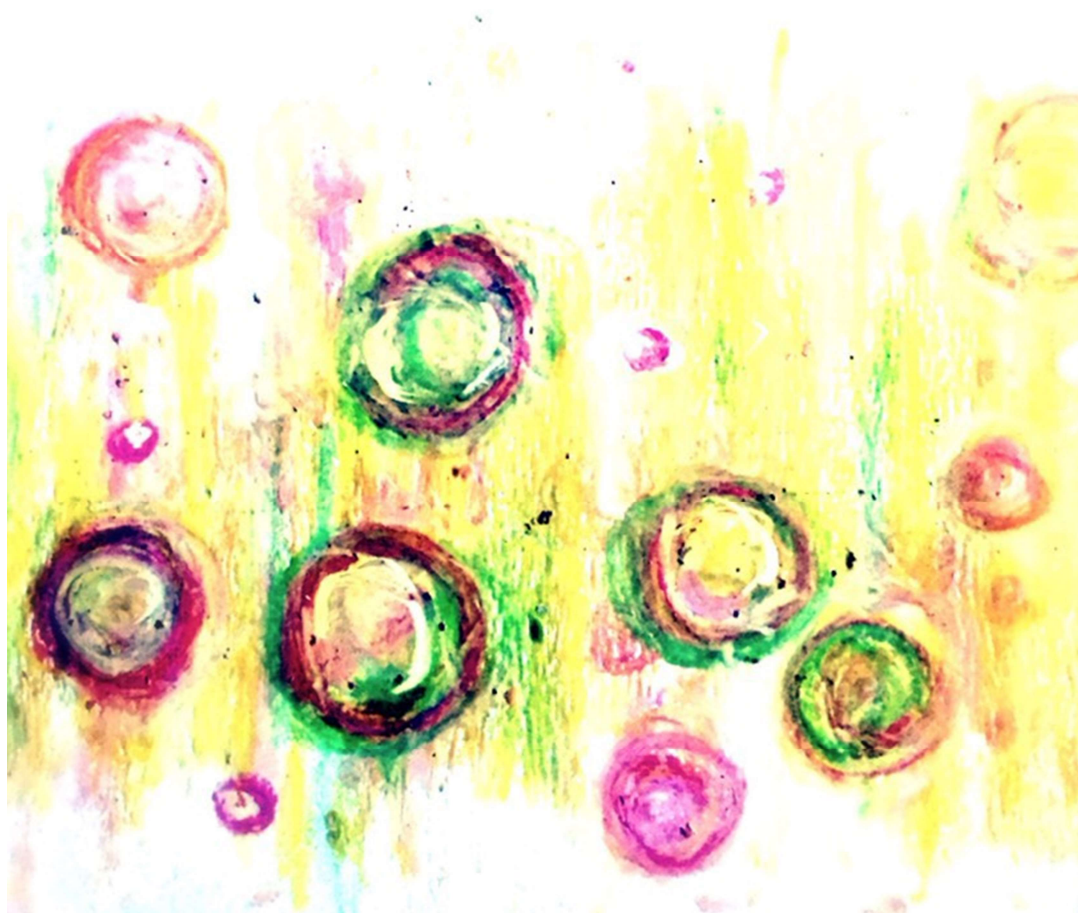


J^{nclusive} ournal of E^{ducation}

Printed 2018.0830
Online ISSN: 2189-9185
Published by Asian Society of Human Services



Feeling of Music [Mamiko OTA]

August 2018
VOL. 5

ORIGINAL ARTICLE

Autism Spectrum Disorder (ASD) 傾向の 子どもに対する社会スキルプログラム開発の ための構成概念の検討

—海外の実践報告分析を中心に—

Consideration of Constructs for the Social Skill Training Program Development for Children with Autism Spectrum Disorder (ASD) Tendency ; Focus on the Analysis of the Practical Report

小原 愛子 ¹⁾, 下地 華愛 ¹⁾, 太田 麻美子 ¹⁾²⁾, 野崎 美沙 ³⁾
Aiko KOHARA Kaede SHIMOJI Mamiko OTA Misa NOZAKI

- 1) 琉球大学教育学部
Faculty of Education, University of the Ryukyus
- 2) 東北大学大学院医学系研究科
Graduate School of Medicine, Tohoku University
- 3) 琉球大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, University of the Ryukyus

<Key-words>

ソーシャルスキルトレーニング, Inclusive Needs Child(IN-Child), ASD 傾向, 構成概念
social skill training Inclusive Needs Child (IN-Child) ASD tendency constructs

colora420@gmail.com (小原 愛子)

Journal of Inclusive Education, 2018, 5:18-33. © 2018 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

Received
25 June, 2018

Revised
17 July, 2018

Accepted
28 July, 2018

Published
30 August, 2018

通常の学級に在籍する ASD 傾向の子どもへの社会スキルプログラムを開発するための構成概念の検討を行うために、海外の ASD 傾向の子どもへ実践報告を分析した。ERIC-Institute of Education Science の論文データベースにおいて「ASD social skill」で検索した結果、14 件が分析対象となった。主に「伝える能力」の「自分の気持ちを伝える」、「語彙力を身につける」といった実践が多く、「場を整理する能力」の「空間を整理する」に該当する実践報告はなかった。「伝える能力」に関しては、特にビデオモデリングやソーシャルストーリーなどの模倣や汎化といった指導方法が効果的とされる実践が多かったため、今後、プログラム開発の際はそれらの手法を取り入れることが重要であることが示唆された。プログラム実施期間は、それぞれの実践によって異なっていたため、さらに分析を行って適切なプログラム実施期間や頻度を考察することが今後の課題として挙げられた。

I. 研究背景

IN-Child (Inclusive Needs Child ; 包括的支援を必要とする子ども) とは、発達の遅れ、知的な遅れ又はそれらによらない身体面、情緒面のニーズ、家庭環境などを要因として、専門家を含めたチームによる包括的教育を必要とする子(韓・太田・權, 2016)を指す造語で、原因や診断の有無によらず教育現場で教育的ニーズを持つ子どもすべてを指す。本研究において ASD 傾向とは、IN-Child Record において「こだわり」と「コミュニケーション」に教育的ニーズをもつ児童生徒を指す。文科省が行った調査(2012)によると、行動面で著しい困難を示す児童が 3.6%程度在籍しており、知的発達に遅れはないものの対人関係やこだわり等の問題を著しく示す児童生徒は 1.1%在籍していることが示された。IN-Child Record(以下、「ICR」)を使用した先行研究においては、ASD(自閉スペクトラム症)の傾向がある子ども達は、コミュニケーションや行動調整といった生活面に困難を抱えていることが明らかになっている(韓・矢野・小原ら, 2017)。

現在、ASD と診断された子どもに関する社会スキル向上プログラムは主に海外でも開発されており、代表的なものとして①基軸反応訓練(Pivotal Response treatments; PRTs) 幼児自閉症プロジェクト(Young Autism Project; YAP)、②TEACCH プログラム、④発達・個人差・関係を基盤にしたアプローチ(The Developmental, Individual-difference, relationship-based model)が挙げられる。これらのプログラムで重要な指導内容の要素としては、活動に従事すること(活動を動機づけること、人や環境からの働きかけに適切に反応すること、一定時間活動を維持すること、独力で遂行できるように行動調整すること)とコミュニケーションの始発に関すること、模倣することがポイントであるとされている(佐藤・桶井・小澤, 2007)。しかし、これらのプログラムは、ASD の診断を受けた子どもに対するものであるため、診断は受けていないものの、教育的ニーズのある子どもに対しては相応しくないプログラムだと考えられる。

通常の学校において ASD 傾向の子どもに対する社会スキル向上の指導は多く行われ、実践報告などの論文や報告書等でも指導課題が報告されている。林・井澤(2012)は、スケジュール表やタイマーを導入して活動移行時の行動問題を低減させるための実践研究を行い、絵カードや写真カード、音声を使用した人名等の基礎的な語彙に関する「排他律による学習」を検証するための実践研究を行っている。伊藤(2012)の ASD 児の指示詞理解における非言語情報の影響を調べた研究では、対人的情報の処理に多く困難を抱える ASD 児の語用論的能力への支援では、言語や話ことばの獲得といった表層的行動を扱うだけでなく、言語獲得の基礎になる社会性の育成への働きかけの重要性を示唆している。しかし、太田・金城・梅田ら(2018)が日本における ASD 傾向の子どもに対する実践研究を分析した結果、社会スキル向上に関する先行研究や実践報告あるものの、指導プログラムとして体系化され効果検証されたものは見当たらず、内容は ASD 傾向の子どもの特性を反映した指導法ではないことが確認された。また、指導の内容は、子どもが何か問題が起こした時の対応や問題が起こらないようにする対処法に関する指導がほとんどで、子どもの能力を伸ばすような指導は行われていない。現在の教育の問題点としては、細かい技術的な方法を用いて指導を行っているので、教育の根本となる社会で必要な能力は育成されているか疑問が残る。今の教育現場に必要な ASD 傾向の子どもに対する指導プログラムは、子どもが社会で必要な能力を身に着けるために子どもの特性に応じて体系化されたものだと考えられる。

また、通常の学校で勤務する教員は、特別支援教育に関する勉強をする機会が少なく、指導経験も豊富でないことが多いため、そのような子どもへの指導に困り感を抱えている教員は少なくない。そういった教員に対して指導プログラムを提案することで、指導への困り感を解消することが必要であると考えた。子どもの実態把握に応じた生活面の指導を実践することは、子どもが将来、社会に出る際に必要な能力やスキルを身に付けることにつながると考えられる。学校現場の教員と子どものためにも、ASD 傾向の子どもに対する指導プログラム開発が喫緊の課題であると考えた。そこで本研究では、通常の学校に在籍する ASD 傾向の子どもに対する社会スキル（社会生活機能やコミュニケーション）向上のための指導プログラムを開発するため、海外の指導プログラムや指導実践を分析することで、指導プログラムの構成概念の検討を行うことを目的とする。

II. 方法

1. 資料抽出方法

ERIC-Institute of Education Science の論文データベースにおいて「ASD social skill」で検索し、表 1 の資料選定基準に基づき資料抽出を行った。

表 1 資料選定基準

- ・ ASD に対するソーシャルスキルトレーニングの実践報告またはそれらのレビューに関するもの。
- ・ 実践の対象年齢は 18 歳までの乳幼児と児童生徒とする。
- ・ 2007 年～2017 年の実践報告を分析対象とする。
- ・ 全文閲覧可能なものを分析対象とする。

2. 分析方法

ASD 傾向の児童に対する実践報告を分析する際には、対象者、プログラムの期間、成果評価方法、介入の目的・プログラムの具体的な内容・成果、の 4 点に分け、IN-Child Record の領域と小原（2017）が示した指導プログラムの領域案（表 2）を対応させて分析を行った。

表 2 ASD 傾向の IN-Child に対する指導プログラムの領域案

指導プログラムの領域	下位領域	根拠となる先行研究	ICR の対応領域
1. 場を整理する能力	物を整理する	TEACCH プログラム	社会生活機能
	空間を整理する		社会生活機能
2. プランニングする能力	時間を整理する	林・井澤（2012）	社会生活機能
	スケジュールを整理する	高橋・松田・宮田（2017） 東・武田（2016）	社会生活機能
3. 伝える能力	語彙力を身に付ける	太田・寛地・北澤（2013） 伊藤（2012）	話す コミュニケーション
	自分の気持ちを伝える	井上・松田・高橋ら（2012）	話す コミュニケーション
4. 注視する能力	注視する	大隅・松村（2013）	不注意 聞く

Ⅲ. 結果

1. 海外の ASD 傾向の児童に対する実践研究

ERIC-Institute of Education Science を用いて『ASD social skill』で検索した結果、668 件ヒットした。このうち、実践報告に関する論文は 112 件あり、全文が閲覧可能なものは 14 件であった。

それぞれの実践研究を対象（表 3）、期間（表 4）、成果評価方法（表 5）、プログラムの目的や具体的内容、成果をプログラム領域案と ICR に対応分析した結果（表 6）に分けて示した。

表 3 社会スキル向上実践研究の対象

文献	診断名（人数），年齢
16)	ASD（男子 7 名、女子 2 名），5～10 歳
22)	ASD（男子 3 名、女子 2 名），14～17 歳
17)	ASD（5 名），中学生
2)	ASD の疑いや ASD 傾向（335 名），乳幼児
6)	ASD（3 名），未就学児
27)	ASD（8 名），幼児
21)	ASD（男子 1 名、女子 2 名），5～6 歳 ASD 児の兄弟姉妹（3 名），9～11 歳
3)	ASD（3 名），3～6 歳
5)	ASD（男子 7 名、女子 1 名），6～17 歳
4)	ASD（70 名），平均年齢 9 歳
23)	ASD（記載なし）
14)	ASD（22 件；男子 64 名、女子 5 名），3～15 歳
15)	ASD（男子 1 名），7 歳
16)	ASD（9 名），6～12 歳

表 4 社会スキル向上実践研究の期間

文献	期間
16)	1 日～6 日間（ただし連続していないこと）
22)	10 週間
17)	最大 8 週間（ただし個人によってばらつきはある）
2)	2 年間，平均週 16.3 時間
6)	7 週間～14 週間（ただし個人によってばらつきはある），週 40 分
27)	記述なし
21)	2 週間（1 日 1 回）
3)	1 週間 2 回（1 回 30 分程度）
5)	3 ヶ月
4)	平均 4 年間（1 日 1.5 時間）
23)	毎週金曜日 1 時間
24)	ASD（記載なし）
1)	記述なし
14)	8 週間

表 5 社会スキル向上実践研究の成果評価方法

文献	成果評価方法
16)	自閉症社会スキルプロフィール (3 領域 49 項目) 改善率差 (IRD)
22)	支援者が参加者を直接観察 ビデオモデリング
17)	教師と研究者がビデオを見ながら観察・評価する 参加者へのアンケート (体験の楽しさ、スキルの獲得に関する自己認識、将来の図書館検索のためのスキルの使用、教育目的のスキルの価値)
2)	介入後の行動評価 親へのアンケート 乳児および幼児、ADOS-T と観察
6)	行動観察 ・子どもが 1 日 3 回の目標行動を示す ・6 つの演劇セッションで社会的コミュニケーション行動と演技行動を 10 点で評価 評価項目は、5 項目で、他者からの関わりに反応することや、想像力や遊びのスキルを伸ばすことなどが含まれる。
27)	名前に反応するまでの時間計測
21)	研究者と母親による主観的評価 行動観察 ・30 分間の観察の間に自発的に目標の行動を行った回数 ・目標は、親や教師へのインタビューを通して設定され、個別教育プログラム (IEP) に記載された社会スキルの目標を設定する
5)	記載なし
4)	ソーシャルスキルの評価尺度 親の主観的評価
23)	生徒に実施したコーチの評価に関するアンケート
24)	記載なし
1)	社会行動評価インベントリ (SBAI) 母親と教師による評価
14)	スコアリングルークル ソーシャルスキルストーリーミングモデル

表 6-1 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
16)	TRACKS <プログラムの目的> ・ASD を持つ子どもたちが、ピア・インタラクションを通じてこれらの子どもたちが社会的スキルを発達させる機会を提供することによって、友人関係を構築すること <具体的内容> ステップ 1: TRACKS の紹介 ステップ 2: システムに報酬を与える ステップ 3: キャンパーの意識 ステップ 4: TRACKS を教える ステップ 5: ピアツーピアによるプロンプト ・包括的な環境のためにキャンプの目的を設定しながら、毎週のキャンプセッションを初日に紹介し、活動内容を教える。キャンプにはグループ補強制度を導入。障がい者が遭遇する可能性のある課題を理解するために、各人が障壁を克服して個々の可能性を達成できるよう指導を行う。この時、達成時に報酬を与える。 活動例…構造活動、非公式のゲーム、自由時間など、さまざまなキャンプ活動 <成果> ・ASD を持つ児童のソーシャルスキルは向上した。 ・特別な関心事について話すのではなく、グループゲームで相互にプレイするなど、より社会的に適切な方法で同輩とやりとりすることができた。 ・親からは、「子供たちはどこに行っても、立ち止まって「こんにちは」と言っている」という報告があった。	3 伝える能力 語彙力を身につける・自分の気持ちを伝える	生活面 社会生活機能 コミュニケーション
22)	VGI(ビデオベースのグループの指導): ビデオモデリング <プログラムの目的> ASD を有する青少年のために有効な新しい社会行動を教えるため VGI(ビデオベースのグループの指導)の有効性を実証する。 <具体的内容> ・ビデオを見た後、グループの参加者には、モデル化された行動をおこなってもらう。 A 児の例: 本人が選んだ特定のコマーシャルを見せる。成人の声で作業を行うように誘発する。 B 児の例: 総運動活動(例えば、行進やダンスなど)を伴う音楽を流す。 C 児の例: ビデオを見て、そこから情報を書き出す。 <成果> A 児の例: パートナーがよく知られたコマーシャルを参照したとき他人と関わった時間が増えた。成人の声の指示に従い資料を置く作業を完了した。 B 児の例: 他人と関わる時間が長くなる C 児の例: ・大人のモデルに反応し、指示に従った。	1 場を整理する能力 物を整理する 3 伝える能力 自分の気持ちを伝える	生活面 社会生活機能

表 6-2 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
17)	ビデオモデリング <プログラムの目的> ・情報リテラシースキルを指導すること(情報を収集して使用するスキル)、会話スキル、適切な遊び、機能スキルの獲得におけるビデオモデリング手順の有効性を評価 <具体的内容> ・参加者はビデオを視聴し、学校図書館の図書館本検索機能の使い方の手順を学習した。その際教師は隣で本を読むなどして、介入を避けた。以下の 12 ステップに分けてそれぞれのタスクが完了するまで繰り返しビデオ視聴を行った。 1. 学生の番号とパスワードを入力して、学校のコンピュータにログインする 2. 「Firefox」インターネット接続を使用してインターネットを開く。 3. 学校のリンクをクリックする。 4. 学校ホームページでは、 "Library Pages" リンクをクリックする。 5. 学生番号とパスワードを入力してライブラリページにログインする。 6. Destiny オンラインカードカタログシステムのリンクをクリックする。 7. 検索ボックスに書籍の名前を入力する。 8. T (検索タイトル) を含むボックスをクリックする。 9. 検索結果画面で目的の書籍を検索する。 10. 書籍の詳細については、書籍のタイトルをクリックする。 11. コピーが利用可能であることを確認する - ボックスの右側にある情報を確認する - 「1 of 1 available」 12. 本の番号を書き留め、本の記録をプリントアウトする。 ※特定のセッションが困難な場合はビデオモデルが指示する。指導終了後、学校図書館のビデオを設置し調査を行い、教師と研究者が観察し評価を行う。参加者もアンケートを行う。 <成果> ・全員が 12 ステップすべてを完了することができた。 ・成功した参加者には喜びのダンスがみられた。 ・英語のクラスで使用する本を見つけることができた。 ・参加者のアンケートについては記述なし。	2 プランニングする能力 スケジュールを整理する	生活面 社会生活機能
2)	<プログラムの目的> ・6-9 ヶ月齢：社会的関与または社会関心を高める。 ・20 ヶ月齢：口頭でのコミュニケーションを高める。 ・12 ヶ月齢：言葉（発声、単語の近似）、非言語的（ジェスチャー、指差し）の能力を高める。 <具体的内容> ・行動要求や非言語コミュニケーションを乳児・幼児と行い、介入していない自閉症児の群との比較を行う。行動要求や非言語コミュニケーションの具体的内容としては、指さしや発生の模倣の要求をする。 ・具体的な内容はセラピストによるガイドラインが存在している（詳細な記述なし）。 <成果> ・生後 1 年の乳児では改善が見られた。目を合わせる、および乳幼児の活発さが増加していること示していた。さらに、目を合わせる、発声、親と幼児とのやりとり中のジェスチャーの増加が見られた。 ・早期介入が学齢期の症状軽減につながるとされた。	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える	生活面 社会生活機能 コミュニケーション

表 6-3 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
6)	the Advancing Social-Communication and Play (ASAP) <具体的内容> ・ ASAP の介入は、一対一（すなわち、大人と子供）とグループ（小児グループの成人）の両方が段階的に行われた。介入の段階は以下の通り。 1. 音声言語病理学者（SLP）および教師または助手が指導する教室のセッションを通じて、子どもたちが典型的な指導を 1 対 1 のセッションで受けた。 2. グループ活動を行う。 3. 音声言語病理学者（SLP）と 1 対 1 セッションを行う。 ・ それぞれの子どもが目標を達成するために、1～3 の手順で介入を行った。 ・ 具体的な方法についての記述なし。（ASAP 介入のマニュアルに従うと記述されている。） ・ 介入のなかで、6 つの演劇セッションがあった。 ・ 演劇セッションのなかで、社会的コミュニケーション能力をみるものであった。 <成果> ・ すべての子どもが社会的対話が増加した。	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える	生活面 社会生活機能
27)	<プログラムの目的> ・ ICT 技術システムを用いて、自立的な社会的コミュニケーションをあげることができるか検証する。実験室に子ども達をよんで、段階的にビデオを見せていく。自分の名前を呼んだモニターに反応し、名前を呼んだ女性を見つけることができることを目標とする。 <具体的内容> ・ 実験室には、5 台のモニター、視線注意追跡システムのついた 4 つのカメラが設置された。 ・ 視線注意追跡システムが名前を呼んだモニターを見たとき検出したら、反応したこととする。手順は以下の通り。 ①モニターに注目させるために「セサミストリート」を見せる。 ②員の名前を呼ぶ ③演奏映像を流す。 ④女性が 2 回子どもの名前を呼ぶ。 ・ 反応しなかった場合、以下の手順でアトラクションを追加していった。 ①ボールが女性のモニターに移動する。 ②ボールがバウンドする。 ③ボールの動きに効果音を付ける。 ・ 女性を見つけることができたなら、言葉でほめたりと花火の映像が流れたりする。 ・ 名前に反応するまでの時間を発達上懸念がない幼児と比較する。 <成果> ・ 60%の幼児児童が①で、11%の幼児児童が②の段階で反応した。 ・ 名前を呼んでから反応するまで平均 3.07 秒かかったが、最終的にすべての幼児児童が反応した。	4 注視する能力 注視する	情緒面 不注意

表 6-4 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
21)	<プログラムの目的> ・ ASD 有する児童がその兄弟姉妹と iPad のゲームをプレイすることを通して、兄弟姉妹とのアイコンタクトや手の接触、順番をまもるなどの社会的コミュニケーション能力を獲得することができるかを検証した。 <具体的内容> ・ 介入は参加者の家で家族全員が在宅している状態で行われた。内容は、赤ちゃんをバスルームで洗い、ごはんを与え、寝かせる。という内容だった。 ・ 目標とする行動は、(i) 兄弟の近くに接近する (ii) 兄弟とのアイコンタクト (iii) 私たちは一緒に遊ぶということを理解する (順番をまもる) (iv) 兄弟の手を取って移動する。と設定された。 ・ 兄弟姉妹は、ASD を有する児童に対して、実行する行動を口頭で説明する。例えば、「交代で赤ちゃんに本を読みましょう。」「私は赤ちゃんの身体をタオルでふきます。」「今、私の番です、あなたは待ってください。」「また、赤ちゃんが寝起きする際、「おやすみ」や「おはよう」の言葉かけをするようにした。ASD 児童が反応しない場合は兄弟姉妹が適切言葉かけをした (「行く前に何を言いますか？寝る？おやすみなさい」など) <成果> ・ 研究者の評価：1 回目の学習機会では社会的コミュニケーションの精度は平均 12%だったが、2 週間後の評価では、順番に、85%・91%・88%に向上した。 ・ 母親の主観的评价：兄弟姉妹とのアイコンタクトの増加、自分の番まで待つことができていた。とされた。また、赤ちゃんが牛乳を飲む様子を効果音で表現できるようになった。	2 プランニングする能力 スケジュールを整理する 3 伝える能力 語彙力を身につける	<u>情緒面</u> こだわり <u>生活面</u> 社会生活機能 コミュニケーション <u>学習面</u> 聞く
3)	Social Cue Cards を使用したプログラム <プログラムの目的> ・ キューカードを用いて、遊びに参加する方法や、社会的コミュニケーションの場面を学習する。 <具体的内容> ・ ソーシャルキューカードの各セットは、白い 3 "×5" (7.6cm×12.7cm) のインデックスカードが 4-5 ページになっている。各ソーシャルキューカードには、漫画のような絵がクレヨンで描かれている。内容は問題の社会的状況、望ましい目標行動、および肯定的な状況が書かれていた。例えば、肩をたたかれた場合私の肩をたたくのをやめてほしいという伝える。ほしいものを音声で伝えるなどである。 ・ カードは各参加者に読ませ、各参加者はカードの内容を繰り返すように求められた。調査官は、誰が、何を、いつ、どこで、そして、なぜ、と質問を行った。 <成果> ・ 参加者の社会的コミュニケーション能力は増加した。 A 児：行動速度、注目する能力が増加した。注目する能力は 8%の増加。 B 児：同齡の子どもとの遊びに参加が、一時減少したが、最終的に 58%の増加が見られた。 C 児：注目する能力が増加した。	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える 4 注視する能力 注視する	<u>情緒面</u> 不注意 <u>生活面</u> コミュニケーション

表 6-5 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
5)	Theatre as Therapy <プログラムの目的> ・ Theatre as Therapy（音楽演劇）を通して、ASD の社会生活機能を向上させる <具体的内容> ・ 音楽演劇に参加し、ミュージカル「Disney's The Jungle Book」に俳優としてそれぞれが役割を与えられた。自分の演じる役割の演技をビデオモデリングを通して模倣学習し、ボランティアスタッフを含む他者とのコミュニケーション、リハーサル日程の管理等のスキル獲得を目指した。 ・ 参加者の家族にも協力してもらい、家庭でのビデオ視聴や個別練習の時間も設定された。 ・ リハーサルは計 38 回行われたが、後半の日程の管理は参加者が行った。 ・ その他にも、ダンスの練習などがあったが、ボランティアスタッフと 1 対 1 で学習しコミュニケーションをとる機会があった。 ・ ステッカーを用いて、視覚的に賞賛を行った。 <成果> ・ 期待した行動を明確にした。 ・ 社会生活機能が向上した。	2 プランニングする能力 時間を整理する スケジュールを整理する 3 語彙力を身につける	身体面 姿勢・運動・動作 情緒面 自己肯定感 生活面 社会生活機能 コミュニケーション
4)	<プログラムの目的> ・ 動物との関わりによって共感能力やコミュニケーションの向上、ストレス減少などを目標とした。 <具体的内容> ・ ASD を有する児童に犬と関わる時間を一日約 1.5 時間設けた。 ・ ペット所有は、社会スキル向上につながるのか、7 つの観点から評価した。 ①コミュニケーション・アイコンタクト・会話・感謝 ②協力・助け合い ③質問 ④責任 ⑤他人の感情 ⑥会話に参加・友達 ⑦自己管理・妥協 <成果> ・ 親に対する社会的スキルの欠損が有意に少なくなった。 ・ 口頭反応が増加した。 ・ 「③質問」の観点のみが向上した	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える

表 6-6 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
23)	運動プログラム <プログラム目的> ・自閉症スペクトラムを有する生徒に対するスポーツプログラムの効果検証 <具体的内容> ・スポーツに関心がなく、休み時間は座って過ごしがちの傾向にある ASD を有する中学校生徒に週 1 回時間、外部コーチを招いてスポーツを行った。スポーツの種類は、クリケット・サッカー・ダンス・ネットボール・芝生ボーリングである。参加者とコーチの比率が 1:2 になるようにチームが編成された。また、励ましの声かけや、ハイタッチ、勝利のダンスを行うなどの工夫を取り入れた。始まる前にウォームアップを取り入れ、コーチと生徒が会話する機会を設けた。 ・全プログラム終了後、生徒にアンケートに回答してもらった。評価の観点以下の通り。 a 楽しんだか、b 友達ができたと感じるか、c 交流は楽しかったか、d すきな経験となったか <成果> ・a～c は 95%、d は 50%の生徒がイエスと回答した。ウォーミングアップでこれからの活動のことなどの質問をするようになった。 ・コーチに対して個人的な話をした。 ・スポーツを続けたいと発言した生徒は 67%。	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える	身体面 姿勢・運動・動作 情緒面 自己肯定感 生活面 社会生活機能 コミュニケーション
24)	ソーシャルストーリー <プログラム目的> ・ソーシャルストーリーは社会スキルを育成するのに役立つかの検証 <具体的内容> ・短い文で提示した絵を説明する社会的ストーリーを表示し、絵の人物に焦点をあてて思考と行動を説明する(なぜ彼らがそれをやっているか)。第 1 言語を使用し、教師は家族と行う。 <成果> ・口頭によるコミュニケーションの増加が 56.25%だった。 ・クラスの仲間との会話が増加した。	3 伝える能力 自分の気持ちを伝える	生活面 社会生活機能 学習面 推論する
1)	ソーシャルストーリー <具体的内容> ・毎週 1 回にソーシャルストーリーを読む活動を行い、毎週火曜日にグループ活動を行った。ソーシャルストーリーの内容は、質問をする(手をあげる)、教材の共有、教師との話し合い、助けを求める、人と挨拶する。 ・自分自身を紹介する、活動に参加する。という行動を学ぶためのものであった。4～5 ページで構成されこれらのページには簡単な文章と写真が含まれていた。 グループ活動では、3 人で構成されたグループで、共同解決を目標とした。 <成果> ・ジェスチャーを使って自分自身を表現すること、手をあげて質問をすることができるようになった。また、目を見ることはなかったが、教師に対して挨拶ができた。 ・グループ学習では、友達に質問ができた。	3 伝える能力 語彙力を身につける 自分の気持ちを伝える	生活面 社会生活機能 コミュニケーション 学習面 読む

表 6-7 社会スキルプログラム領域案と ICR の対応分析

文献	指導内容と成果	社会スキル プログラム 領域案	ICR の 対応領域
14)	運動プログラム（サッカー） <プログラム目的> ・能力の異なる子供たちのサッカー練習を奨励すること - 子どもの生活の質を向上させるための包括的なプログラム開発を促進し、さらには健康でスポーツ的な習慣の創造を促進すること。 <具体的内容> ・第 1 セクション：基本的な運動のスキルを組み合わせ、運動の側面を解決する。項目…動き、ジャンプ、投げ/蹴り、キャッチ・ターン ・第 2 セクション：対戦の有無にかかわらず、遊びや身体活動の基本的な技術および対戦時の課題などを解決する。原則や規則を指導しながら、遊びや活動を実施する。項目…ワンタッチパス、ボールの運搬、ペナルティショット、ボールコントロール ・第 3 セクション：批判的態度を示す他者や自分自身の身体的現実を認めて受け入れ、尊重する。 ・第 4 セクション：困難な状況に対して批判的な態度をとって、他者の意見を受け入れる討論する。項目… 教室で行われたゲームの特徴と発展をパートナーに説明することができる、合理的な方法で紛争を解決する意欲を示すことができる、セッション中に不適切な行動を理解することができる。 ・第 5 セクション：自己尊重と身体的および遊ぶ活動における他人のために、個人的かつ社会的に責任ある行動を実証する。同時に、子供たちは関心と個人のイニシアチブとチームワークを示す基準と規則を受け入れる。項目… 運動スキルの能力を向上させるために興味を示すことができる、自律的で自信を持った態度を示すことができる、資料の収集や組織に参加することができる、良いスポーツマンシップで参加し、スポーツ競技の結果を受け入れることができる。 <成果> ・すべての参加者が動きやターンを獲得することができた。 ・3 人の参加者が正しい投げと蹴りを達成した。参加者のうち 4 人がボールコントロールの正しい実装を達成できた。 ・他の子供たちと異なる運動能力のレベルを尊重する能力は、2 人の参加者によって達成された。 ・3 人の参加者が教室で行われたゲームの特徴と発展をパートナーに説明することができた。 ・「妥当なやり方で紛争を解決する意思を示すことができる」は、5 人の参加者のうち 4 人によって達成。 ・「セッション中の不適切な行動を理解することができる」は、5 人の参加者のうち 4 人が達成。 ・すべての参加者が運動能力の向上に関心を示し、5 人の参加者のうち 4 人が自律的で自信を持った態度を示した。3 人の参加者は自分自身を紹介する能力を向上。 ・怒りのコントロールでは、3 人の参加者が許容できるレベルのコントロールを提示し、他の参加者の 1 人が有意な改善を示した。	3 伝える能力 語彙力を身につける 自分の気持ちを伝える	身体面 姿勢・運動・動作 生活面 コミュニケーション

2. 指導プログラムの領域案への対応分析結果

実践報告の内容から、指導プログラムの領域案に分類したものを表 7 に示す。主に該当するプログラムがあったものは、「3.伝える能力」の「自分の気持ちを伝える」、「語彙力を身につける」、「2.プランニングする能力」の「スケジュールを整理する」であった。「1.場を整理する能力」の「空間を整理する」の育成に関するプログラムのみ、該当する報告がなかった。

表 7 指導プログラム領域案と社会スキル向上プログラム実践研究の対応分析結果

指導プログラムの領域		プログラム名・実践内容	文献
1.場を整理する能力	物を整理する	VGI(ビデオベースのグループの指導): ビデオモデリング	22)
	空間を整理する	該当なし	
2.プランニングする能力	時間を管理する	Theatre as Therapy	5)
	スケジュールを整理する	ビデオモデリング	17)
		兄弟姉妹との iPad を使用した実践	21)
		Theatre as Therapy	5)
3.伝える能力	語彙力を身につける	兄弟姉妹との iPad を使用した実践	21)
		Theatre as Therapy	5)
		ソーシャルストーリー	1)
		運動プログラム (サッカー)	14)
		TRACKS	16)
		VGI(ビデオベースのグループの指導): ビデオモデリング	22)
		親が介入する乳幼児への社会スキル向上実践	2)
		the Advancing Social-Communication and Play (ASAP)	6)
		兄弟姉妹との iPad を使用した実践	9
		ソーシャルキューカード	3)
	自分の気持ちを伝える	動物と関わる実践	4)
		運動プログラム	23)
		ソーシャルストーリー	1)24)
		運動プログラム (サッカー)	14)
		技術システムを用いた名前に反応する実践	27)
4.注視する能力	注視する	ソーシャルキューカード	3)

IV. 考察

本研究では、通常の学校に在籍する ASD 傾向の IN-Child に対する社会スキル（社会生活機能やコミュニケーション）向上のための指導プログラムを開発するため、指導プログラムの構成概念の検討を行うことを目的とした。

ERIC-Institute of Education Science を使用し、海外での ASD 傾向の児童に対する実践研究を検索した結果、113 件あり、そのうち 16 件が全文閲覧可能であった。

指導プログラムの実践内容を見ると、ビデオモデリングの実践、ソーシャルストーリーの実践、運動プログラムが 16 件中 2 件あった。これらの実践は、映像で行われていることや目の前の人を模倣したり、ある場面を想定してそれらを汎化したりする内容となっている。このことから、ASD 傾向の子どもに対しては、モデリングを取り入れた指導プログラムが効果的だと考えられる。また、ソーシャルキューカードを使用した実践や iPad を使用した実

践は、学習の手順や内容を視覚的にしている方法が用いられており、視覚化することによって ASD 傾向の子どもが混乱する人間関係や社会のルールなどを理解するのに役立ち効果があるのだと考える。また、運動プログラムやダンス、演劇などを通して社会的スキルを向上させた実践もあり、身体を動かしながらの介入、対象者以外の児童も参加するといった実施形態も重要であると考ええる。

実践プログラムの介入期間をみると、プログラムによって 1 日から 3 年までと異なっていた。ほとんどのプログラムが、最低 1 週間 1 回の 1 ヶ月以上の期間を通して介入を行っており、ASD 傾向の子どもに対する介入は比較的長期な期間が必要であると考ええる。また、1 回の実施時間も 30 分～1.5 時間とばらつきがあった。どのような指導内容にするかによって実施時間及び実施回数をさらに検討する必要がある。

プログラム領域別の領域別に対応分析させた結果、「3.伝える能力」の「語彙力を身につける」、「自分の気持ちを伝える」、関する実践報告がほとんどであり、「1.場を整理する能力」の「物を整理する」、「2.プランニングする能力」の「時間を整理する」、「4.注視する能力」の「注視する」、に関する実践報告は少なかった。また、「2.場を整理する能力」の「空間を整理する」の能力に該当する実践方向がなかった。TEACCH プログラムでも、「構造化」に関する指導方法があるため、これらを取り入れた社会スキル向上プログラムを開発する必要があると考えられる。

ASD の特徴として、特に他者とのコミュニケーション・意思疎通に目立った困難を抱えていることが挙げられる。本研究で分析した実践研究もコミュニケーションに関するものが多かった。しかしながら、ASD 傾向の子どもに対しては、困難とされるコミュニケーション能力を向上させることも必要だが、それ自体が ASD の特徴であるため、コミュニケーションの向上を目指すだけでなく、子どもの将来を見据えて場を整理（構造化）する能力やプランニングをする能力を育てるような介入が重要になると考える。

今後は、日本のプログラムや今回閲覧できなかった海外論文なども具体的に分析し、プログラムの内容や実施時間、実施期間などを決定し、社会スキル向上プログラムを開発する必要があるだろう。

文献

- 1) Amin Noor A., Oweini Ahmad (2013) Social Competence Intervention in Autistic Spectrum Disorders (ASDs) - A Case Study. *International Journal of Special Education*, 28(3), 104-120.
- 2) Bradshaw Jessica, Steiner Amanda Mossman, Gengoux Grace & Koegel Lynn Kern (2015) Feasibility and Effectiveness of Very Early Intervention for Infants At-Risk for Autism Spectrum Disorder: A Systematic Review. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45(3), 778-794. doi: 10.1007/s10803-014-2235-2
- 3) Caballero Amberly & Connell James E. (2010) Evaluation of the Effects of Social Cue Cards for Preschool Age Children with Autism Spectrum Disorders (ASD). *Journal of Behavior Assessment and Intervention in Children*. 1(1), 25-42.

- 4) Carlisle Gretchen K. (2015) The Social Skills and Attachment to Dogs of Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45(5), 1137-1145. doi: 10.1007/s10803-014-2267-7
- 5) Corbett Blythe A., Gunther Joan R., Comins Dan, Price Jenifer, Ryan Niles Simon David, Schupp, Clayton W. & Rios Taylor (2011) Brief Report: Theatre as Therapy for Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 41(4), 505-511. doi: 10.1007/s10803-010-1064-1
- 6) Dykstra Jessica R., Boyd Brian A., Watson Linda R., Crais Elizabeth R. & Baranek Grace T. (2012) The Impact of the Advancing Social-Communication and Play (ASAP) Intervention on Preschoolers with Autism Spectrum Disorder. *The International Journal of Research and Practice*, 16(1), 27-44.
- 7) 韓昌完・太田麻美子・權偕珍 (2016) 通常学級に在籍する IN-Child(Inclusive Needs Child : 包括的支援を必要とする子) Record の開発. *Total Rehabilitation Research*, 3, 84-99. doi: 10.20744/incleedu.4.0_36.
- 8) 韓昌完・矢野夏樹・小原愛子・權偕珍・太田麻美子・田中敦士 (2017) IN-Child Record の信頼性及び構成概念妥当性の検証 -横断データを用いた分析-. *Total Rehabilitation Research*, 5, 1-14. doi: 10.20744/trr.5.0_1
- 9) 林周一・井澤信三 (2012) 活動移行時に激しい問題行動を示す自閉症児に対する先行子操作と結果操作による介入 -行動問題と望ましい行動の随伴性の分析に基づく支援計画の立案-. 特殊教育学研究, 50, 45-54. doi: 10.6033/tokkyou.50.45
- 10) 東正美・武田鉄郎 (2016) 発達障害のある子どもの成長過程における教育的支援のあり方に関する実証的研究 -日常生活チェックリストと身体活動量を活用して-. 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 67, 43-50. doi: 10.19002/AN00257966.67.43
- 11) 井上美由紀・松田幸恵・斎藤絵美・下平弥生・高橋晃・宮崎眞 (2012) 自閉症児に対するコミュニケーションおよび会話指導の実践研究 1. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要. 11, 273-288
- 12) 伊藤恵子 (2012) 言語情報と非言語情報の不一致場面における自閉症スペクトラム障害児の指示詞理解の特徴. 特殊教育学研究, 50(1), 1-11. doi: 10.6033/tokkyou.50.1
- 13) 小原愛子 (2017) 通常の学級に在籍する ASD・ADHD 傾向の子どもの社会スキル向上プログラム開発. 平成 30 年度 科学研究費助成事業若手研究 研究計画調書.
- 14) López José María, Moreno-Rodríguez Ricardo, Alcover Carlos-María, Garrote Inmaculada & Sánchez Sergio (2017) Effects of a Program of Sport Schools on Development of Social and Psychomotor Skills of People with Autistic Spectrum Disorders: A Pilot Project. *Journal of Education and Training Studies*, 5(8), 167-177. doi: 10.11114/jets.v5i8.2555
- 15) 文科省調査 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
- 16) Maich Kimberly, Hall Carmen L., Van Rhjin Tricia Marie & Quinlan Laurie. (2015) Developing Social Skills of Summer Campers with Autism Spectrum Disorder: A Case Study of Camps on TRACKS Implementation in an Inclusive Day-Camp Setting. *Exceptionality Education International*, 25(2), 27-41.

- 17) Markey Patricia T. (2015) Introducing an Information-Seeking Skill in a School Library to Students with Autism Spectrum Disorder: Using Video Modeling and Least-to-Most Prompts. *School Library Research*, 18.
- 18) 大隅順子・松村京子 (2013) 自閉症児・知的障害児における文字への注視を促す支援教材に関する視線分析研究. 発達心理学研究, 24(3), 318-325. doi: 10.11201/jjdp.24.318
- 19) 太田歩・宮地弘一郎・北澤公造 (2013) 自閉症スペクトラム児のコミュニケーション支援に関する事例研究. 南九州大学人間発達研究. 3, 3-7.
- 20) 太田麻美子・金城晶・梅田真理・韓昌完 (2018) IN-Child Record の分析に基づいた ASD 傾向のある IN-Child に対する指導法の分析. *Journal of Inclusive Education*, 4, 36-53. doi: 10.20744/incedu.4.0_36
- 21) Özen Arzu (2015) Effectiveness of Siblings-Delivered iPad Game Activities in Teaching Social Interaction Skills to Children with Autism Spectrum Disorders. *Educational Sciences: Theory and Practice*, 15(5), 1287-1303. doi: 10.12738/estp.2015.5.2830
- 22) Plavnick Joshua B., Kaid Tiffany, & MacFarland Mari C. (2015) Effects of a School-Based Social Skills Training Program for Adolescents with Autism Spectrum Disorder and Intellectual Disability. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45(9), 2674-2690. doi: 10.1007/s10803-015-2434-5
- 23) Rosso Edoardo G. (2016) Brief Report: Coaching Adolescents with Autism Spectrum Disorder in a School-Based Multi-Sport Program. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46(7), 2526-2531. doi: 10.1007/s10803-016-2759-8
- 24) Sani Bozkurt Sunagul, Vuran Sezgin (2014) An Analysis of the Use of Social Stories in Teaching Social Skills to Children with Autism Spectrum Disorders. *Educational Sciences: Theory and Practice*, 14(5), 1875-1892. doi: 10.12738/estp.2014.5.1952
- 25) 佐藤克敏・桶井恵・小澤至賢 (2017) 自閉症教育における指導のポイント ―海外の 4 つの自閉症指導プログラムの比較検討から―. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 34, 17-33.
- 26) 高橋甲介・松田果織・宮田こころ (2017) 自閉症スペクトラム障害児における排他律を用いた人名理解の指導効果に関する検討. 教育実践総合センター紀要, 16, 137-144.
- 27) Zheng Zhi, Warren Zachary, Weitlauf Amy, Fu Qiang, Zhao Huan, Swanson Amy & Sarkar Nilanjan (2016) Brief Report: Evaluation of an Intelligent Learning Environment for Young Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46(11), 3615-3621. doi: 10.1007/s10803-016-2896-0



Journal of Inclusive Education

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Changwan HAN University of the Ryukyus (Japan)

EXECUTIVE EDITORS

Aiko KOHARA University of the Ryukyus	Keita SUZUKI Kochi University	Shogo HIRATA Ibaraki Christian University
Atsushi TANAKA University of the Ryukyus	Kenji WATANABE Kio University	Takahito MASUDA Hirosaki University
Chaeyoon CHO Tohoku University	Kohei MORI Mie University	Takashi NAKAMURA University of Teacher Education Fukuoka
Eonji KIM Miyagi Gakuin Women's University	Liting CHEN Meiji University	Takeshi YASHIMA Joetsu University of Education
Haejin KWON University of Miyazaki	Mari UMEDA Miyagi Gakuin Women's University	Tomio HOSOBUCHI Saitama University
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University	Mika KATAOKA Kagoshima University	Toru HOSOKAWA Tohoku University
Ikuno MATSUDA Soongsil University	Minji KIM National Center for Geriatrics and Gerontology	Toshihiko KIKUCHI Mie University
Kazuhito NOGUCHI Tohoku University	Nagako KASHIKI Ehime University	Yoshifumi IKEDA Joetsu University of Education

EDITORIAL STAFF

EDITORIAL ASSISTANTS

Mamiko OTA Tohoku University / University of the Ryukyus

Sakurako YONEMIZU University of the Ryukyus

as of April 1, 2018

Journal of Inclusive Education

VOL.5 August 2018

© 2018 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Sunwoo LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa,
903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa,
903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.5 August 2018

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Investigation of Japanese Elementary School Teachers' Practices and Attitudes Regarding Diversity Education

Masaki FUKADA, et al. 1

Consideration of Constructs for the Social Skill Training Program Development
for Children with Autism Spectrum Disorder (ASD) Tendency
; Focus on the Analysis of the Practical Report

Aiko KOHARA, et al. 18

A Survey on Flexible Supports by Teachers of Special Needs Class in Public Elementary Schools

Kenichi OHKUBO, et al. 34

SHORT PAPERS

The Verification of Reliability for Self-assessment(High School Student's Version) of
Scale for Coordinate Contiguous Career (Scale C3)
; Analysis using Okinawa Prefectural High School Student's Data

Haruna TERUYA, et al. 53

The Current Issues of the Teacher Training System and Diversity Education in Higher Education Institution
; Based on the Research of Japan, Korea, US and UK

Haejin KWON, et al. 61

ACTIVITY REPORT

The Study of Training for Children with Specific Difficulties in Learning English
; The Effective Spelling Training Considering Cognitive Functions

Sayano KAMIOKA, et al. 77

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan